

文化遺産観光と「流用」のふるまい

—マレーシア・ペナンのストリートアート空間から—

“Performance of Appropriation” on Cultural Heritage Tourism:

—A Case of Street Arts in George Town, Penang, Malaysia—

鍋倉 咲希

NABEKURA Saki

キーワード：文化遺産観光，ストリートアート，流用，フラヌール，ペナン

Keywords: Cultural Heritage Tourism, Street Art, Appropriation, Flâneur, Penang

1. 研究の背景と目的

本研究はペナン・ジョージタウンの世界遺産空間に観光事業者が生み出すストリートアートがいかにか既存の文化遺産観光のメカニズムを再編するのかを観光社会学的に明らかにするものである。

文化遺産制度と地域住民の生活に関する人類学的論考では、考古遺産・町並み遺産の両議論において、制度と住民生活の間に生まれる価値や歴史認識の齟齬が生み出す暴力性が指摘されてきた。

これらの研究は、世界遺産制度をとりまく多様なアクターの存在を認め、制度の一元的な価値観を相対化している点で評価できる。しかし権力主体と地域住民の対立が重視されるあまり、記述において〈制度—地域住民〉の二項対立図式が保持され続けている。そこで本研究では、この図式を地域住民の視点から捉えなおすことを第1の目的とした。

また、社会学的論考は文化遺産観光の負の側面に焦点をあててきた。キーワードはリアリティ／ローカリティの喪失、物語化である。文化遺産は観光の影響を受けることにより、地域のリアリティが消毒されたり、語りが一画一化したりする危険性を持ち、そのなかで文化遺産観光がもたらす負のメカニズムは、文化遺産イデオロギーをさらに強化させている。

一方で文化遺産イデオロギーを相対化する可能性について、「モノ自体の力」によって文化遺産に多元的な解釈を開く可能性があることも指摘される。そこでは観光や文化遺産制度が意識的に利用され、住民が自分たちの生活を守る様子が議論されている。

しかし、本研究が対象とするジョージタウンのストリートアートは、意識的に制度を活用し文化遺産制度に抵抗／適応する気はほとんどない。ここでみられる偶発性と気ままださは既存の枠組みでは分析することができない。第2の目的として、ジョージタウンの事例が文化遺産観光の持つ負の構造をいかにか脱するのか明らかにすることとした。

2. 研究の方法と手続き

本論文のデータは、筆者が2015年3月から2016年9月までに行った4回の現地調査による。現地ではストリートアートを持つ観光事業者（土産物屋・カフェなど）やアートをテーマにするGeorge Town Festival（以下GTF）、遺産保護団体Penang Heritage Trust（以下PHT）、地域住民らに聞き取りを行った。

3. 研究の概要

本論文は7章で構成されている。

第1章では文化を消費するものとしての観光の性質について論じ、本研究の問題意識を明らかにした。

第2章ではユネスコが考えてきた世界遺産における「遺産」概念の変遷を整理した。

第3章では文化遺産観光に関する先行研究のレビューを行い、研究の背景と目的を提示した。

第4章ではマレーシアおよびペナンの概要について論じた。特に多文化都市としてのジョージタウンとマラッカの、国内における立場を明らかにした。

第5章ではストリートアートの発展過程について現地調査のデータから整理した。

ストリートアートがジョージタウンに初めて設置されたのは2012年にGTFで行われた企画による。その後2013年ごろからは観光事業者がストリートアートを自店舗の壁に設置するようになった。特に2015年以降には、ストリートアートを持つ店舗が急増し、一部の地区は観光エリアとして発展した。

これらの展開過程を整理すると、ジョージタウンの世界遺産の空間には①ジョージタウンの住民が暮らす生活空間、②世界遺産によって価値づけされた空間、③ストリートアートによって発達したテーマパーク的観光空間という3つの層が存在することがわかる。しかし考古遺産の保護において地域住民が排除されたのに対して、ペナンでは住民にとっての空間へのアクセスや認識の断絶性はみられなかった。

第6章では指摘した3つの空間の層がいかなる関係にあるのかを明らかにした。

GTFやPHTなどの世界遺産の価値観のもと活動を行っている団体は、ペナンのストーリーや住民の真正な生活世界を破壊するテーマパーク的観光空間を憂慮している。ここでは世界遺産の価値空間が所与のものとしてされ、地域の生活空間を守るために観光空間が「逸脱」したものとして位置づけられている。つまりここにある構図は、先行研究でみてきた〈制度—地域住民〉の二項対立と同様だといえる。

しかし、ペナンにおける観光事業者あるいは地域住民の側から見れば、世界遺産制度による社会状況は敵ではない。地域住民と世界遺産制度との関係を示す具体的な例として①世界遺産制度との距離、②マスメディアと制度の内面化、③ストリートアートをめぐる実践の3つがあげられる。

たとえば③に関して、観光事業者はストリートアートの評価を観光客目線で行っており、絵の質や観光客のインタラクティブ性が最も重要であるとした。そこではストリートアートが当初持っていた役割や価値は消え、「観光のため」という新たな目的が付け加えられている。ここで観光事業者たちは文化遺産制度から提示されたアートという方法を盗みつつ、そこに自分たちの価値を滑り込ませているのである。

つまり、ここでの観光事業者の行為はM.ド・セルトーのいう「流用」の概念で捉えることができる。彼らは3つの空間の層を気ままに横断しているのだ。

一方で観光産業への適応が流用といえるならば、結局現場では観光による変化は管理できず、地域のリアリティは失われるのではないかという疑問が出てくる。第6章の後半ではその点を「モノ自体の力」と「ストリート（アート）を歩く」から考察した。

後者に関して、セルトーは都市の管理システムに対する抵抗の実践は意識的なものと無意識的なものがあるという。彼は都市を歩く歩行の実践に無意識の主体の表出を見出し、都市に刻まれた固有名（〇〇通りなど）が人々の陶酔を呼ぶものであるとした。

これをジョージタウンの観光空間に当てはめると、都市における無意識的な主体はストリートアートをめぐって町を彷徨する観光客であり、固有名は都市に配置されたストリートアートだといえる。つまりストリートアートの観光空間は観光客を都市管理システムへの無意識の抵抗者として顕在化させる力を持っているのである。

しかし、ここでペナン州政府の立場に立ち返ると、これらの行為は結局ルフェブルのいう「日常性」に回収されているのかもしれない。第6章の最後には、州政府は世界遺産のブランドもアートの知名度もすでに都市戦略に組み込んでいることを指摘した。日常性のシステムは日々更新され続けており、ペナンにおける価値観の摩擦や流用なども、すべてそのままの形で日常性に織り込まれている。

しかし、ジョージタウンの気ままさに立ち返るとき日常性から抜け出す契機があるのではないか。州政府が想定できないストリートアートの突発性は必ずしも日常性に回収されない可能性を示唆している。

4. 結論

第1の目的に関しては、地域住民にとってジョージタウンにおける3つの空間は断絶しているのではなく、層の横断は流用のふるまいによって行われていることが明らかになった。

第2の問いに関しては、都市の意識的／無意識的な実践が先行研究で指摘されてきた文化遺産観光の負のメカニズムを相対化することが明らかになった。

したがって、現代観光のなかでも、ストリートアートをめぐる観光のように観光の制度下で既存の価値を超えて突発的に起こる出来事は、一瞬でも日常性を揺るがす力を持っていると考えられる。■